

近世初頭における都市貴族の生活

村山修一

【要約】 安土桃山時代より江戸初期にかけてのいわゆる封建制再編成期における公家の生活を、西洞院時慶の日記を中心に考察し、町人・武士・農民等との交渉を通じて公家の伝統が封建社会にどのような寄与をなしたかを論じたのである。

中世より近世初頭にかけてのめまぐるしい歴史的変転は、近時政治的社会的経済的等種々の角度から詳細に検討がすすめられ、その成果はみるべきものがあるが、とくにここでは武士や農民の動向が中心課題となつてゐるようである。しかし同時にこの兩者の動向には古代の権威・古代的伝統に対する渴仰・憧憬が纏綿してゐたことを忘れてはならないので、この意味からも都市貴族たる公家の存在は決して見落されてはならないものである。

周知のように武士階級のほか都市の町人や一般庶民との交渉が深まつた当時においては、公家社会は幾多の領域においてその封鎖的意識をすてざるをえなかつたので、それには公家自身の必要に基づくものもあつたらうし、他の階級からの要請に応じたものもあつた

であろう。何れにしてもこの時期にみる公家生活の変貌はよく変転期の都市「京都」を象徴してゐると同時に、徳川封建体制発足期の側面をも物語つてゐるのである。これを私は当時数ある記録日乗のうちでも、最も内容の豊富な時慶卿記を通して具体的に考えてみたいと思う。(なお以下の叙述中、時慶卿記より引用の部分については一々書名を掲げず、括弧の中に年月日のみを記するに止めたから、そのつもりで御覧願いたい。)

二

時慶卿記の今日みうるところは天正十九年(一五九一)春夏秋、文祿二年(一五九三)、慶長五年(一六〇〇)同七年、同八年、同九年、同十年、同十四年、同十五年、同十八年、同十九年春夏、元和四年(一六一八)同七年、寛永五年(一六二八)同六年、同九年、

同十四年、同十五年、同十六年（一六三九）春夏で、前後四十九年にわたるうち、十九年分が残存するわけである。西本願寺の自筆原本は終りの寛永十四・十五・十六の三年間が各一冊宛小形の本になつているほかは、各年とも美濃版の大形本である。走り書きで文字が小さく、行間はつめてあるので余り読み易くはない。龍大の図書館には写本（三十四冊本）があり、この方がよみ易いが、往々読解出来ぬところは空白になり、写してあつても本当によめなかつたのか正しく写せていない文字も少くない。京都府立図書館にはこれと全く同じ写本があり、ただ冊数が細かく分けられていて七十二冊になつているので、恐らく龍大本から写したものと考へる。

時慶は天文二十一年（一五五二）に生れ、寛永十六年十一月二十日八十八歳を以てなくなるまでのうち、現存の日記は四十歳の時から歿年までの部分があり、これは社会的にも相当の地位をえてからの期間で、恰も豊臣、徳川両政権の交代期を含んでいるだけに貴重な史料といえよう。次に時慶の閏歴をみると、四十歳のとき従三位非参議となつてから寛永元年七十三歳のとき参議従二位で出家しており、堂上公家としては末席に列しながら位階は非常に昇進している。もと飛鳥井家の出身で、従一位権大納言雅綱の子、安居院覚澄を父とするが、覚澄の弟正二位権大納言雅春（教雅）の養子となり、天正三年四月右兵衛佐に任ずるとともに公虎の名を改めて時慶とい

い、従三位左兵衛督西洞院時当のあとをついだ。

飛鳥井家は周知の通り、その先藤原師実の五男忠教に出で難波氏と同系、藤原摂関家に対してはかなり支流になるが、忠教の子頼輔の頃より蹴鞠・和歌両道に堪能の家として特色をあらわし、曾孫雅経は新古今集撰者の一人に入り、室町時代康正・文明の交には雅親出でて天下の歌の判者と仰がれ、將軍義政のため「古今榮雅抄」や「筆のまよひ」を著わし、入木道にも一派を立てた程で地位も従一位権大納言に達した。弟の雅康も和歌・書ともにすぐれ、正二位中納言に上り、爾来飛鳥井家は室町中期以前の世代にはみられぬ高い地位を保ち、雅親の曾孫雅春は秀吉に、雅春の孫雅庸は家康に歌道を伝え、さらに雅庸の子雅章は後水尾上皇より古今伝授をさづかつているなど、公家としては珍しく時代の脚光を浴びた家柄であつた。

これに対して西洞院家は桓武平氏の流で保元の乱前後に活躍した平信範の後であるが、歴代はおおむね従三位から従四位、参議ないしは地方の守で、今を時めく飛鳥井家に対しては些か低い地位にあつた。それゆゑ西洞院家としては時慶の地位はむしろ高い方であつたが、やはり飛鳥井家の出身であつたこと、その娘時子が慶長五年後陽成天皇の掌侍となり、同十四年永宗女王を、翌十五年皇子高乗院（三歳で死去）を生んだことなどの理由によるのであろう。男子には時直・時庸・忠康・時貞があり、時直あとをつぎ、時庸は平松

家、忠康は長谷家、時貞は交野家をたてることになった。こうして西洞院家は時慶の時より大いに発展したのであつた。

しかし経済的には彼の時代に検地があつて相当財源をきりつめられたが、莊園侵奪の結果所領が有名無実化したのに比べれば一応最低生活は保障されたわけで、朱印により二百七十三石を給せられた（明治には二百九十二石になつていた）。年貢運上の村々には紫竹・松崎・一乗寺・花園・朱雀・久我・三本木・今里・御所内・高島石庭（場）等があり、石庭のみは近江の高島郡（いまマキノ町に入る）にあり、他は都の周辺地区であつた。紫竹は四村ばかりあり、三本木は二条の北、賀茂川の西岸、今里・御所内は鳥羽方面にあつた。

また女時子も新たに慶長五年高島の年貢が与えられているが、これは時慶より分与したものか、別に給されたものか明かでない。何れにせよ、時子の知行分も時慶が管理していたのである。天正より慶長の始めにかけてはこれら諸村よりの水帳及び指出がしきりに徴せられ、慶長五年十月二十日には、家康は公家衆に対し、一せいにすべて知行の指出を提出させた。時慶は平氏の氏神である平野社をも管理していたので、同社の指出も召されたところ、指出と水帳が一致しないとして朱印状を徴せられる（慶長五、十、二十四）など寸土もゆるがせにはされなかつた。家中や平野社の造作、庭園の手入れ、旅行の伴あるいは駕籠昇きなどはこれらの村々から人手を徴して問

に合せた。年貢の運上は必ずしもスムーズに行われず、収獲期における年貢の督促はその記事が極めて多くみえ、感情的な文句に乏しいこの日記中でも、未進に対する憤懣だけは強く記されており、減免の申請には頗る強硬な態度をみせているが、これも困れば武家にすぎる手段があつたからである。前記慶長五年の指出提出は所司代の下役人である松田勝右衛門に対して行われたが、この際折箱を贈つたところ贈物は停止とて返却されてきた（慶長五、十、二十四）のは情実を防ぐためであり、幕府の峻烈な態度が伺われる。知行地からのほか、時慶の収入となるものには医者として診察・投薬の報酬があり、平野社に対する信者からの寄進や護符・祈禱等の報賽があり、さらに色紙短冊ないしは写本の依頼による礼物等があげられよう。これらは当時公家の副収入の主なものであろうが、宗教・学問・文学の三者は公家の古代的權威を支える最後の砦であつたのである。以下私はこの三点を主として彼の生活をのべてゆきたい。

三

時慶卿記の史料的価値が一つには多数の文獻類の記事がのせられている点にあることは周知である。私が全体を通覧して拾い上げえた書物の種類は百余種に上り、そのうち書名の正確に判明するものを類別して示すと次のようである。

歌集及び歌学

古今集 新古今集 続古今集 後撰集 千載集 新千載集 拾遺集

草 公任集 匝槐集 袖中抄 建保百首 名所和歌抄 悦目抄 井

蛙抄 梁塵愚案抄 至宝抄 百人一首 歌林良材 古今伝授 顯注

密勘 詠歌大概開書 新古秘説抄 手爾波大概抄 連歌新式

一般文学

源氏物語 伊勢物語 狭衣物語 大和物語 土佐日記 五代帝王物

語 平家物語 曾我物語 神皇正統記 水鏡 大鏡 方丈記 本朝

文粹 朝野群載 貴船物語 酒天童子 紀伊国鏡巻物語 月光 花

満 今日は三人僧 富士人穴 岩屋 滝口

歴史・有職故実・神道等

日本書紀 職源抄 応仁記 新撰姓氏録 延喜式 公卿補任 貞永

式目 河海抄 花鳥余情 公事根元 樵談治要 拾芥抄 和名抄

元亨積書 九条右丞相遺誠 草人木 倭漢合運図 唯一神道名法要

集 中臣祓 年代記(甫庵編) 決疑抄 野槌

医学

啓迪集 医方明鑑 本草衍義 医学源流 素問入式運氣論奥 本草

綱目 延寿撮要 神農本草

漢籍

尚書 論語 孟子 大学 老子 莊子 孝子経 古文孝経 蒙求

周秦行記 皇朝類苑 碧巖録 古文真宝 遊仙窟 北圃全集 貞観

政要 説文解字

すなわち上記九十四種を類別すれば、歌集及び歌学二十四種、一般文学二十三種、歴史・有職故実・神道等二十二種、医学八種、漢籍

十七種となり、歌や文学に興味が集中されていることは異とするに

足らぬが、仏書は意外に少く、医学に注意を払っている点、彼の生

活の特色が窺われる。さりとて仏教信仰には下記のように決して無

関心ではなく、むしろ生活上の必要から読書の傾向が左右されてい

るところがあるのである。これらの書物の中には当時盛んとなった

木版印刷の本もあろうが、多くは写本と考えられ、彼の蔵書か然ら

ずんば借用書写して書架にそなえる等、文献蒐集は頗る積極的であ

った。夏季には虫干しを行い、書写したものは表具師をよんで丁寧

に製本させた。表具師には何人か出入りがあつたらしいが、宗久と

いう上手の表具師は縫師の町の者だといつておる(寛永九、五、二

十二)ところからみてそうした職業者の多い町があつたことをしる。

懇になつては古今伝授の本をみせてもらい(慶長五、三、一)、ま

た頭注密勘拜見をゆるされ(慶長五、三、二十)、こうした点に公家としての誇りを感じていたようである。慶長四年には勅により名所和歌集を撰進し、其後も名所の歌についての勘問に答弁している

(慶長五、正、十八)。一方、流行の連歌にも深く興味をよせ、みずから新式の講義をしたり(天正十九、六、十六)、連歌師昌叱の宅における新式講に参加して談義をきき(天正十九、八、二十七—三十)、ノートしたことを丁寧に清書し、不審は昌叱に問い糺して研究した(天正十九、九、三一—六)。また紹巴の連歌至宝抄を研究し不審の点があるとのべているが、すでに同書は慶長・元和・寛永の頃に二、三種の出版があつたので、これらの刊本によつたものかと思われる(寛永九、八、五)。歌論書では井蛙抄を仙洞御所から借用して自分の所蔵本と校合したが、仙洞本は脱字多く善本でないといつている(寛永九、八、二十九—三十)。自分で歌も作るが元来

字が達者で方々から短冊色紙の揮毫を依頼された(元和七、十一、十二)。禁中倭漢朗詠の会には召されて執筆役に参上し(天正十九、四、十六等)、豊臣秀頼よりは短冊十枚の注文あり(慶長八、五、二十八)、里村昌琢よりも頼まれたことがあり(寛永六、十、二十六)、さては因幡堂の鐘つき坊主の注文をひきうけたり(寛永六、五、十七)、中々これだけでも忙しかつた。短冊の下絵は絵屋久五

郎を呼んで誂えさせるのが常であつた(慶長五、七、十九)。

能筆のため禁中の手習講に招かれ(断つたが)(文禄二、三、二十六)、門跡へ教えに赴いたり(文禄二、八、十七)、皇族の御手習の御相手をつとめたり(慶長八、四、十六—十七)したこともあつた。こうして和歌・連歌を通じ交友は公家衆以外にも広く及び、細川幽齋・前田玄以・紹巴・昌叱・昌琢・玄仍・玄仲・立於・似運(雲)・能礼・能舞・遊行上人他阿以下多くの町人があつた。豊国社頭の連歌会(慶長十、十一、十九)前田玄以追善(慶長八、四、二十九)紹巴追善(慶長七、十一、十二)北野聖廟七百年万句会(慶長七、二、二十五)等各所で催される会合には公家・武家・僧侶・神官・町人等の接触の機会が頗る多かつたのである。

一般文学については、源氏物語に最も関心が集中された。五十四帖のうち、帖の名前がみえるのは三十三帖だが、むろん全部読んだものであろう。当時連歌俳諧の影響をうけて源氏の需要高まり、慶長年間すでに青表紙系統本の開版が行われたが、またあちこちより借用して熱心に書写し、七十七、八歳の高齢でもせつせと筆を走らせていた(寛永六、四、十二—十三)。人に頼まれての必要と、一方では河内本の存在を記しているところから異本の書写のためであつたのかもしれない。石山寺へ参詣しては源氏の間をよく見学している(慶長八、三、十七)。慶長七年九月より近衛家では源氏の講

義が始められた。時慶始め小寺如水・神光院・松梅院・妙藏院・曲直瀬正琳等の顔ぶれで、始めの頃は昌叱が読み役になつてゐた。恰も近衛家には西行・後京極撰政・伏見院等の書かれた古写本があつて拝見した(慶長七、九、十五)。源氏講釈は禁中でもあつて子息

時直はよく出席していた。これと併行して何時頃から出来たのか源氏絵が流行した。経師にたのんで表紙をつけたり裏打ちをさせたりしている(寛永五、八、十一・十六・寛永六、四、六等)が、これは絵巻物でなく物語中の一つの情景を題材として画いた一枚一枚ばらばらのものであつたらしく、その詞書を竹内門跡・西園寺・園・日野・持明院などの公家に依頼したり(寛永五、十二、五・寛永六、四、八・九等)、人からの希望で詞書の揮毫をしたりしている(寛永六、三、十七)。また小瀬甫庵(道喜)が時慶にみせた詞書には、後奈良院や竹内門跡の古い歴代の筆跡があつたという(元和七、八、十二)。甫庵は豊臣秀次の侍医で多数の書籍を印刷刊行したことで知られているが、時慶と親しかつた。その他の作品では伊勢物語に藤原為氏の自筆のものがあつてこれをしき写したり(寛永六、四、二十八)、時庸から為氏の古筆切をもらつたり(寛永六、五、六)しているが、他にも伊勢物語の古写本があつて筆蹟の鑑定を求められている(寛永六、七、十九)。寝ながら読むものには曾我物語(慶長十、二、十五・十七)やお伽草紙の類があり、上には掲げな

かつた草紙で「丹波医カヲウノ物語」(慶長十、三、七)といううな書名もみえている。禁中でも双紙読みは盛んであり、時慶自身筆写を命ぜられたりした(文禄二、十一、六)。

それよりも興味のあるのは平家物語で、座頭を呼んで琵琶をきいたり(慶長十五、四、二十三)、往生院の比丘尼を招いて妓王妓女の物語を読ませたり(天正十九、二、二十六)、みずからも繰返えし読んだが、当時この社会には「ソバ説」(天正十九、閏正、一)なるものがいて面白く聴かせたらしい。女の時ににはお伽衆がいて時慶はこれにいろいろ氣を遣い贈り物をしている(慶長十八、正、十三・寛永十六、三、十三)のも同様の職業者と思われ、彼等は大名など有力武士階級のみならず公家社会にも盛んに進出していたのである。平家物語には別に物語絵があり、禁中ではその詞を公家衆寄合つて清書している(寛永五、二、十二・同年、十一、七)。考古画譜(巻十)によると、絵は土佐光信筆、詞書は杉原伯耆守、全八巻より成るが、近時梅津次郎氏(『美術史』三十五号所収「伝光信筆平家物語絵巻」)は小笠原千代子氏所蔵の絵巻がその一部にあたるものとせられた。白描の小巻ながら詞書をよみつつ鑑賞するのに手頃な絵であつて当時数多くつくられたのであろう。時慶には源氏絵程の魅力はなかつたらしい。

その他の書籍としては彼が神官であるため神道に関心が深く、日

本書紀ことに神代紀に親しみ、中臣祓や神代系図を研究し神龍院梵舜についてその指導をうけ、妙法要集によつて十八神道の作法を授けられている。なお慶長十五年四月十日に要法寺の（世雄坊）円智が日本書紀二十八巻を持参し、あとより神代巻も届けているのはあるいは刊本ではないかと思われる。蓋し円智は種々の開版事業に従事した学僧で活版には興味をよせた人であつたからである。どうもよくわからぬ書名に「雷石炮炒論」がある。お氣付の方はお教え頂きたい。

転じて漢籍關係をみると、この方もかなり執心があつて当時禁中や公家の間で論語（文禄二、二、二十一）莊子（慶長九、六、十四）蒙求（寛永十六、五、二十七・同年、六、三十四）孟子（寛永六、七、二十七）大学（寛永九、六、十六）老子（寛永九、八、十二―三十、同年九、九）等盛んに講釈が行われ努めて出席した。文禄二年、勅をうけ古文孝経の開版を行ったのは有名で、文禄・慶長の役に朝鮮から将来の銅の活字一式を利用したものであろう。御湯殿上の間で植版に従ひ十一月十六日印行終り十二月八日に本を拜領している。ついで慶長八年四月一月には白氏文集上陽人長恨歌等の部が刊行せられ、元和七年九月には皇朝類苑十五冊の銅活字による勅版印刷があり、それぞれ一部を下賜されている（元和七、九、二十）。当時林羅山は「野槌」をあらわして古典に対する儒教的合理的解釈を試

みたが、時慶は寛永六年始めてこれを見、関心をひいたらしく同年閏二月末まで約三カ月かかつて借覽抜書している。

医書については当時曲直瀬玄朔が出て盛んに著述を行い医学は新しい進歩をとげつつある時期で、時慶もそうした新しい知識をとり入れるため玄朔に師事していた。とくに役立つたのは医方明鑑であつたようで、借用して全部筆写している（慶長十五、四、十七）が、元和九年春この書物は刊行された。そのほか延寿撮要・医学源流・運氣論等も刊行されており、恐らく彼も入手したことと察せられる。薬種についても明の万曆年中に出来た本草綱目を利用しており（寛永九、六、十五）、最新の知識を活用した点、かの山科言継の頃と比べると非常なへだたりがある。

以上が時慶の読書の主なものであるが、書の堪能であることから借用書写の書物は相当の量に上り、書架にはそれらが大切に整理保存されていた。慶長五年七月、西軍が伏見城を攻め砲声が京都市中にもきこえた頃はいち早く書物の避難を始めた程で、あと元通り書架へ収めるのに一カ月かかつたとこぼしていた。禁中の書籍の整理にも屢々召されており、書誌的造詣は深かつたようである。

四

ここで彼の医者としての生活をもう少し眺めてみよう。上述の

ように玄朔（二代目道三）に師事し医学の講義をきき（慶長八、十二、一）、自分や家族の病気には彼の診察をうけた（慶長五、正、八一十・同七年、六、十二・同七年十、九・同九年、十一、二十四等）。時には彼とともに自邸で酒宴を張り、玄朔は謡を試み、この方は時慶が師匠格であつた（慶長五、二、二十三）。時慶はかなりの酒豪で自身屢々二日酔や下痢で悩んでいることがある。往診・投薬の範圍は広く、御所（慶長九、五、二十六―七）公家衆はもとより、僧侶・武士・町人に及ぶが、投薬で注目されるのは癪のような腫物と梅毒（横根）・淋病等性病が多いことで、後者は子息時直始め公家衆・僧侶・武士や町人（元和七、九、十等）を含み、当時の社会に急速に広がりがつあつた事情を察知する。これは華かな安土桃山期の裏面を物語る有力な資料となるであろう。診察投薬の謝礼は酒樽始め多く品物として受けていた。

玄朔のほか外科医道春（元和七、七、九）や道察法橋（寛永五、二、十一）益運軒道徳（寛永九、四、十三）相庵（寛永六、二、十）会津の清庵という若い医者（寛永十五、四、八）玄哲（寛永五、九、九）、さては唐人の医官（元和七、九、十五）御幸町の馬医（慶長七、五、六）など医者には知己が多く、薬種は因幡という薬屋のほか、下町の薬屋某（元和七、七、十四）など二、三あり、堺からは沈香を売りにくる商人新右衛門があつた（慶長五、正、二十・元和七、七、

九等）。このほか庭園に多くの薬草を植え栽培していた。元來草花好きで様々の植物を集めていたが、日記に散見するものをざつと拾い出してみると次のように六十余种に上り、実際はもつとあつたと思われる。

- 松 杉 檉 梅*（鶯宿梅） 桃 椿（白椿） 柿 桜 梨 楊梅
- 久年母（橘） 蜜柑 柚 金柑 躑躅（紅及び白） 木瓜 木蓮
- * 山椒 石榴 白芷 漆 南天 藤（白及び紫） 葡萄 孟宗竹
- 蘇鉄 芭蕉 葵（白） 芍薬（紅及び白） 牡丹 山吹 芙蓉（白）
- * 薄荷 白玉草 龍胆 紫蘭 蘭 石竹 撫子 款冬 白萩 百合
- * 薤 菊 夏菊 南蛮菊 桜草 香薷（石薺蓼） 木槿（白） 紫
- 陽花 益母草 鉄線花（白） 罌麦 金錢草 鳳翥草 藕根 水
- 仙 赤蒲公草 桔梗（白） 鳳線花 仙翁花 鴛鴦花 鷄冠花
- 茄子 紫蘇 括樓根

*印をつけたのは薬用のもので、とくに芍薬の栽培には力をいれ、他所によい芍薬があるときいては見にゆき苗の交換をしたりしている。下京の大黒屋本島与七や岩屋三郎なる町人の庭にはよい芍薬があつたらしく（慶長十、四、七）、久太郎という花作りのところにも芍薬がつくられていた（慶長十、五、二十一）。二月も半ばを過ぎると庭の藤が満開になるので諸方より見物者がつめかけた。公家衆、連歌の友人、医者の方を招待したこともあり（慶長五、二、

十八）、堺の町衆（同上）や京都の町人連（慶長十五、四、六）が見物したこともあつた（同上）。芍薬には「酒天童子」（慶長十八、九、六）、牡丹には「酔揚妃」という品種がつくられていた。

転じて宗教家としての生活はどうであつたかをみよう。神道を梵舜にうけたことは既述の通り、北野社及び豊国社は毎月参拝し、家でも天神の画像をかけ（慶長九、十一、二十五）礼拝していた。神官である平野社のためには広く奉加を勧請し、公家のみならず武家要人からも受けたが、これは社殿の修築等にあてたようである。神事祓を豊臣秀頼・毛利輝元・前田玄以へ贈っているのは奉加の礼の意味であろう（慶長五、八、十一）。あるときはみずから護符を水で飲み下しているが、護符の申込みは方々よりあつたらしい（寛永五、七、十一）。彼自身も愛宕山や多賀神社（慶長九、九、二十五）大峯（慶長九、十、十八）等の護符をうけている。仏教信仰も厚かつたが、別に特定の本尊を信するわけではなく、光明真言も唱えれば融通念仏も誦し（慶長七、五、十六・同九年、九、十六）、法華寿量品も書写すれば（文禄二、二、十九・慶長七、四、二十六）、日蓮宗の円智からは法華十是如の義の教えをうけ（慶長七、四、十七）、遊行上人から十念をさつかる（慶長八、四、五）こともあつた。元三（慈恵）大師像の版木を揃てはつておくことは降魔的利益益があるとして中世民間にも広く行われた俗信であるが、多数を揃

る程利益が大きいと信ぜられるようになり、時慶も毎日これを行い、時には数日かためて揃っていた。蓋し版木の流行により、護符は近世に入るに從い社寺の経済的理由もあつて益々盛んとなつたのである。また時代の影響で大黒天像をつくらせ（寛永十四、九、十九・同年十一、二十四—二十六）、大黒祭をいとなんでいるし（慶長八、十、十二等）、福祿寿星の画像をかけてまつることもしている（寛永十四、正、二十九）。あるいは十一面觀音を康音という仏師につくらせ（寛永九、四、十三）、厨子も誦え（寛永九、四、二十七）、その金物は餅屋甚太郎をよんで打たせた（寛永九、五、二十五）。

以上の様々な信仰は最早公家武家等上層階級の特権的なものではなく、むしろその思想的潮流の中心は町衆や富裕農民層にうつた感がある。彼等にとつて宗教が興味あるのは護符の類による生活の安穩、とくに利殖の幸運に対する呪術的効能と宗教自身もつ古代的権威の名残りが広く社会的交渉の上に有利に利用されるからであつた。時慶の宗教生活にみられるところも所詮はそうした時代の動きを反映しているにすぎず、而も彼にはその古代的権威が医者としての権威をそえる所以ともなるので、新しい医学は玄朔から学んで科学性を加えたといつてもなお且呪術的意識は払拭出来ぬものであつた。

五

こうして宗教は一般的なものとなりつつ卑俗化し、多くの教団や各種の宗教的組織は真の宗教的精神によつて世俗と結ばれるよりは新たな封建権力の支配機構の一翼となつて（それはキリシタン禁圧がよい口実となつたが）形骸化した。一部の社寺靈場はその宗教行事を芸能的に発展させることにより庶民社会の重要なリクリエーションの場としたのである。而も当時すでに宗教と芸能の結びつきは宗教権威の凋落につれて弱体化し、一般民衆にとつては芸能観賞の場所としてのみ社寺の存在が必要だつたにすぎない。

盆躍の如きは治安が確立するに伴い益々盛大となり、ことに京都では各地大名の出入に伴つて豪華絢爛の趣味が町を風靡し、必ずしも社寺とは限らず至るところで市民達の躍や各種の芸能がくりひろげられた。時慶みづからはその渦中に投じなくても、都市の歓楽的气氛の旺盛の一つには封建的束縛の加重に対する反抗的気持もあつて公家衆・町衆を等しく興奮の世界に引き入れたのであつた。文禄二年十月五日には禁中で盛大な能が行われ、時慶は御膳方の奉行を命ぜられたが、秀吉・家康・織田秀信等手猿楽を演じ、ことに秀吉の能は一番毎に公家伝奏がほめることになつていて禄物は三百貫積まれ、演者はすべてこれを分ち賜つたという（文禄二、十、五及び駒

井日記）。ついで十一日にも同様秀吉以下演ぜられ、この日の観衆は殆んどが女房衆であつた（文禄二、十、十）。さらに十七日前田玄以は自邸に能を催し、秀吉や公家衆は見物に赴き、十二月三日にも同様催され公家衆が観賞しているが、その際は紹巴・昌叱・玄仍等連歌師も交つていた（文禄二、十二、三）。同じ月五日は近衛家で能があつた（文禄二、十二、五）。このように秀吉・家康らの能愛好は公家社会、ひいては京都市民にもその流行を一層盛んならしめる結果となつた。これに伴つて素人の狂言や謡も大はやりで、時慶が夜更に隣に謡の声をきくのは（文禄二、十一、十九）練習熱の盛んさを物語るものであつた。時慶も謡は堪能とみえ、会合の余興には屢々一席演じており、息子の謡の師匠として大和宗恕なるものをつんでいた。

禁中では能のほか操もよく催され、夏節には盆跳（躍）・カブキ跳・ヤ、コ跳など町の行事がもちこまれた。慶長五年六月には出雲の女衆が御所に推参して「ヤ、子跳」を夜更までお目にかけており（慶長五、六、二十九）、七月一日には近衛邸で演じたが、これは男女十数人よりなる躍の一座であつた。好評であつたのか八月一日にもまた近衛邸に招かれた。慶長八年五月には女院御所でヤ、コ躍あり、出雲の一座が招かれ時慶も阿野と出かけたが、貴賤群集して非常な雑踏であつた（慶長八、五、六）。六月には公家衆の間で躍が企て

られ、時慶の子息も金銀の衣装を凝らし出場の準備で大童になつていた（慶長八、六、二十六）。九月には五歳の童子の「カブキ跳」があつて人々の注目をあびたが（慶長八、九、十七）、翌年にはさらに度々演ぜられ獅子舞なども行つたようである（慶長九、三、二十四）。慶長九年七月には女院御所へ永仁町から躍の一団が参つたので阿野と時慶の二人が招かれて見物した。「金銀ノ尺タル出立也中躍五十人計棒持百計銀ノ笠棟也」という賑さで夜は勧修寺にも躍ありと知らされたが、すつかり疲れて行く元氣もなかつた（慶長九、七、二十三）。一方豊国社の臨時祭には京中挙げてお祭り気分にひたつた。公家衆全部見物しようお触れがあり（慶長九、八、十三）、時慶は妙法院門跡の棧敷で見物した。始め田楽、ついで能あり、金春・観世・金剛等の出演で、のち書院で酒宴・躍があつた（慶長九、八、十四）。この間町では躍の行列が練り歩き、小川組・西陣・上立元・台町・中筋組・六十町等上京の連中で禁中へ推参お目につけて夜に入つては下京の連中がおしかけた。公家衆は清涼殿に集つて見物、酒・粽の馳走があつた（同年、八、十五）。遠くは松崎あたりからも躍の一隊が女院御所・禁中をねり歩くことがあつた（元和七、七、二十四）。禁中では唐人を召しよせ花火を実演せしめられ、時慶は「奇妙」と感歎した（元和七、七、二十三）が、近衛家でも唐人参上してお目につけた（元和七、七、二十八）。時慶の邸は寺町

に近く、丸太町より北にあつたが、御霊社の御旅所が近かつたのか、「御霊ノ御旅所ニ勧進能アリ謡聞」（慶長十、二、二）、「御霊御旅所ニ女楽在之跳音聞」（慶長十、三、三）などとのべていて、時には子息等とつれ立つて見にゆくこともあり（慶長七、二、十）、町衆の中に交つて見物したのである。また益に恒例の灯籠献上は絵屋の喜介をよんで彩色や絵をかかせた（慶長九、七、七十一）が、寛永九年の頃は、禁中の灯籠見物に巡礼が沢山群集したという（寛永九、七、十五）。夏節のお祭り気分は徳川政權が安定するようになってもこのように盛大さを加え、公家衆は挙げて町の人々と欲を尽していた。そうしてこういう機会こそは公家が町衆始め一般庶民達と交渉を深めるのに大きな役割を演じたのである。

六

以下時慶と交渉のあつた人々を通して彼の生活環境を考えてみよう。

連歌・医学ないし趣味教養を通じての交友はほぼ上にのべた如くであるが、これらの交友には余り身分の高くない人々が多かつた。ことに連歌より俳諧への新しい動向が卑賤の連歌師達の力にまつたと大きかつた当時、これは避けえなかつたのであり、医学にあつても幸朱学派による新しい治療は幼稚な公家の衛生知識を啓蒙せずに

おかなかつた（尤も公家の医術はどこまでも家計のためであつて、あくまでこれを科学的に発展させようとする意欲には乏しかつた）。

かくて古代的権威は新時代の潮流の前に門戸を開かざるをえず、それによつて草花の趣味、文学的有職的教養など公家が独占的にたのしみうるものと思われた分野の知識も庶民社会の交友に逐次開放せられ、それによつて交友はいよいよ深められた。さらに彼が自邸の茶会に招いた知己には後藤徳乗・蒔絵屋宗真・大文字屋宗味・小袖屋宗是・針屋宗春等があり（元和七、十二、九）、これらの人々は何れも始めは商人として交渉のあつたものが多いが、互いに教奇の道を通じて結ばれるようになった。また井倉六衛門はよく日記に出てくる人物で金融業者らしく、小紅屋某は北齋の墨蹟拝借を申出する程の教養人であり、家の召仕に招いた鶴という娘は父を淀屋太郎右衛門といい両替町から来たとあるから（寛永九、正、五）金融業者の娘だつたのかもしれない。米屋宗福も昵懇の町衆で、つれ立つて北野・今宮の社参をしている（慶長五、正、十五）。大坂船場の油屋久右衛門は油一桶を持参、挨拶に来ているが（文禄二、十二、十二）、これも相当の町人らしい。薬屋の播磨某は定家の筆蹟を百貫で入手したとて時慶に見せにきており（元和七、十、六一八）、絵屋の甚四郎には草花の無心をいうなど、ここでも趣味教養を通じて町人達との友好は高められていつた。またどんな關係からか唱門師

常盤なる者が礼に來たとて食事酒を出して接待しているが（文禄二、十二、十二）、珍しい情景である。一般の町家に対しても氣を遣い、正月梨木町・二階町裏町等に挨拶したり（寛永五、正、十五）、二条町の家々に何かを振舞つたり（寛永五、九、十）、福永町からは町の伯おきなになつてくれと所望されたが（寛永十五、八、十三）、伯のたのまれる程親しみがあつたのであろう。かつて林屋氏は山科言繼卿記の記事から永禄を境に公家の町衆に対する関心がガラリと變つて稀薄になり、再び以前のように町人に対する輕蔑的階級意識が高まつたことを指摘されたが（同氏『町衆の成立』）、いま時慶卿記を検討することによつて、これは考え直す必要があることを痛感した。つまり徳川政權が出來ても公家と町衆や庶民との關係は決して遮断されてはいないので、むしろ均しく封建的圧力をうけている点からいへば相結ばれる場合もあつたのである。

世は泰平になり公家の生活は安定したといふ條、昔日の如き寛裕さは許されず、かえつて町人の中にはそれ以上の富者も少くない時節となつて、最早や古代的権威の下に町人を「富有下郎」「潤屋之賤民」などと見下すような時代の再来を期待する望みの絶えた社会の下で、頼るべきは知行地からの年貢とそれをバックする所可代の権力のみであつたのである。町人や庶民との階級的差別はたしかに従来よりきびしくなつても、それは經濟的感情的にその間に大き

なへだたりが出来たわけではなく、その差別は形式的、政治的意味のものにすぎなかつた。むしろ時慶にとつて当面の関心は、最初にも

のべたように所司代を中心とする幕府勢力にとり入つて、ともすれば渋滞しがちな知行地の年貢を確保しようとする農民に圧力をかけてもらうことであつた。徳川氏実権を握る以前においても、京都の市政を司つた前田玄以に連歌等を通じて嘉みを深めたが、板倉勝重所司代となつては、毎年年頭、公家衆が年賀にゆき御機嫌を伺うのが恒例の如くなつた（元和四、正、十等）。その他の有力武家としては豊臣秀頼・毛利輝元・細川藤孝・片桐且元等があり、歌や文学等の教養を通じて結ばれたので、そこに公家の古代的權威の残滓を多少とも誇示しうるわづかな余地がのこされていたに止まる。時慶の日記には数々の政治的な重要事件が記録されており、利休の最後、鳥居元忠の伏見籠城、関ヶ原の合戦、京都における西軍諸將の処刑、豊国社の破却等がそれであるが、これらに対しては殆んど何の批評も感想も書かれず、石田三成等三条河原に梟首の際は衆人とともに平然と見物していた（慶長五、十、一）。所詮武家相互の政治的關係については冷淡であり、誰が天下を取ろうと、要するに形式的ながら天皇や公家をあがめ、且その生活を一応保障してくれるような

政治でありさえすればよいという諦観が支配していたように思われるのである。

かくて近世初頭町人の経済力はいよいよ公家社会に滲透し、その反面教養信仰を通じて古代的伝統は町人世界に深く流れ込み、これが経済的優越感と結ぶことによつて、やがてそれは町人の封建批判的精神、古代への憧憬を媒介とする人間自由の空気を醸成するに至つた。いわゆる上方文化の興隆は実に近世初頭において、とりわけ京都の都市貴族の生活のうちに、すでにその顕著な萌芽をみせていたのである。

〔後記〕

本論文は昭和三十二年度文部省科学研究費個人研究による成果の一部であり、その一端は三十四年十月、京都大学付属図書館における講演で述べたところである。願れば時慶卿記を読み出してから早や六、七年の星霜を閲したが、この間閲覧に關し、原本は東京大学史料編纂所の青木一馬・奥野高広両氏の、写本は京都府立図書館上衛氏及び龍谷大学図書館各位の御好意を頂いたのであつて、いま改めて心からの謝意を表する次第である。

（一九六〇・四・十三記）

transition. Correct knowledge should be supplied by the then fact, the Peloponnesos War, which followed many disasters that ever had and gave chances of many-sided investigation in human character. The constancy of humanness helps one to have foresight corresponding to similar facts. Supported by the spirit that a brave and farseeing leader could make a honourable polis in history, he thought correct writing of facts made 'eternal possession'.

On *Kôden* 公田

by

Yasuo Izumiya

Because of a wide-spread and easy-going conception that *Jôden* 乘田 stood for the very *Kôden* 公田 meant by *Ryônoshûge* 令集解, in spite of a frequent appearance of the word '*Kôden*' in resources of *Ritsuryô* 律令 era, the fundamental study on this point seems to be untouched, but without this full recognition one cannot fully understand the transition of landholding system in *Ritsuryô* system and the formation of manorial system. From this point of view this article tries to research *Kôden* fundamentally. *Kôden* meant originally farm land before *Kubunden* 口分田, while it, by being cultivated, seemed to be treated as *Yuchishiden* 輪地子田. By enforcement of the *Yôrô* 養老 law, however, it was authorized to earn by cultivating for six years as *Yusoden* 輪租田; in the first year of *Tenchô* 天長 the period to earn by cultivating was postponed to life-time. Along with the dissolution of the *Gôko* 郷戸 system, *Kôden* was identified with *Kubunden*. After the eleventh century the authorization of lord right on *Kôden* resulted in the use of the word *Kôden* which meant *Yusoden* correlative against *Fuyuso* 不輪租 manor. Such transition of *Kôden* naturally followed change in meaning of *Shiden* 私田 and manor.

Life of City Nobles at the Beginning of the Tokugawa Era

by

Shûichi Murayama

The life of city nobles, from the *Azuchi-Momoyama* 安土桃山 period to the first *Edo* 江戸 period, so-called reorganized feudalistic

period, is to be considered the contribution of the nobles' tradition to the feudalistic society in relation to merchants, samurai, and farmers, around the diary by *Nishinotôin Tokiyoshi* 西洞院時慶.